

平成 30 年 6 月 5 日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04445

研究課題名(和文) 幼児の音楽的感受性を伸ばす身体・言葉・図像表現を組み込んだ音楽表現活動の開発

研究課題名(英文) Development of activities for musical expressions integrating physical, linguistic, and graphical expressions to promote young children's musical sensitivities.

研究代表者

深田 昭三 (FUKADA, SHOZO)

愛媛大学・教育学部・教授

研究者番号：50228863

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：幼児が歌う即興的な歌を質的に分析したところ、語の意味的な属性の剥奪と、繰り返し構造が特徴的であった。質問紙調査でのパス解析では、保育者の音や子どもへの感受性が、子ども中心の音楽活動を通して、子どもたちの創造的な音楽活動に影響を与えていたことが明らかにされた。音楽的アクティビティの開発では計20件のアクティビティを開発し、これらのアクティビティの組み合わせでプロジェクトの2件を実践した。一つは、森のサウンドスケープ体験から発展するプロジェクトであり、もう一つは手作り楽器の体験から発展するプロジェクトの2件を実践した。研究成果は論文及び幼稚園教諭対象の講演会を通じて幼児教育界に還元した。

研究成果の概要(英文)：Qualitative analyses of young children's spontaneous songs showed that the spontaneous songs were characterized by deprivation of linguistic meaning from words and repetitions of phrases (ostinato). Path analysis of a questionnaire revealed that teachers' sensitivities to natural sounds and children's movements enhanced the qualities of children's creative music activities through frequency of child-centered music activities. Then, 20 musical activities are developed, and two projects are carried out by combining the developed activities. One project started with soundscape experiences, and the other with enjoying hand-made instruments. Research findings were provided to community of early childhood education through academic papers and lectures for teachers.

研究分野：発達心理学

キーワード：音楽的感受性 音楽的アクティビティ 音楽表現プロジェクト

1. 研究開始当初の背景

保育者が豊かな音楽的感受性を持っていることは、子どもたちの音楽的な表現を促す上で重要な基盤を提供する。研究分担者の小池(2009)は、保育者対象の「音楽的な感受性尺度」を開発し、保育者の音楽的な感受性(視聴覚を通じた感受性、幼児の言動に対する感受性)が、保育者の音楽表現(身体表現と言葉表現)を経由して、幼児の身体的な表現、音楽的な言葉表現、歌唱表現に影響を及ぼしていることを、パス解析を用いて見出した。一方、保育者の実技表現能力は、幼児の身体・言葉・歌唱の表現には影響を及ぼしていなかった。つまり、幼児期の保育においては、単に保育者が音楽実技の能力を備えていることではなく、音楽的感受性が豊かな保育者が身体や言葉で豊かな表現をすることが、幼児の音楽能力を高めるために重要であることが示唆された。

幼児期の音楽的表現については、発達の早期から、身体の動きや言葉との相互関係の上に芽生えていくことが知られている(名須川, 1998; 岡本, 1998; 遠藤, 2000 など)。そのため、子どもの歌の歌詞には数多くのオノマトペが含まれている(葛西, 2012)。研究代表者である深田は、Fukada & Nonaka (2013)において幼児の日常の保育場面において観察される幼児の身近な音への感受性を事例を通じて検討した。その結果、(1)リズムカルな音への気づきが、オノマトペを含むリズムカルな言葉や自発的な歌を引き出し、また身体の動きを誘発すること、(2)個々の子どもが刻む音・言葉・身体の動きが結合したリズムは他者を誘い込み、自然発生的な合奏とも言える共同的な音楽表現へと発展していくことを見いだした。

さらに、音楽的表現と描画などの図像的な表現との関連も指摘されている。たとえば音の印象と視覚的な印象とが結びつく音象徴という現象が知られており、そこではオノマトペが重要な役割を果たしている(Imai, Kita, Nagumo, & Okada, 2008)。日常的にも、描画や視覚的イメージからオノマトペや手や体の動きが誘発されたり、絵を描きながらオノマトペを発したり歌ったりすることもしばしば観察される。このことから、音のイメージを描画で表したり、描画の印象を音楽的に表したりすることも音楽的な感受性を高めていく際の有望な方法として考えられる。描画などの図像表現を音や音楽にかかわる実践に取り入れていく実践もすでに試みられている。たとえばイタリアのレッジョ・エミリア・アプローチでは、幼児が音の印象を描画で表したり、音楽の流れを描画で表したりするなどの試みが行われている。

2. 研究の目的

本研究課題は、幼児期の音楽的感受性に関

する理論的・実践的研究である。まず、A. 幼児期の音楽的感受性について、日常保育場面での音のリズムへの気づきについての質的研究と、保育者への質問紙研究による量的な検討を行う。B. 幼児では音の経験が身体の動きや言葉(オノマトペ)との相互関係を持っており、図像表現によって身体の動きやオノマトペが誘発されることに着目して、音楽的感受性を伸張するために効果的なアクティビティと、そのアクティビティを組み合わせた長期のプロジェクトを開発・実施する。このような取り組みを通じて、幼児を対象とした新しい音楽表現指導モデルとして、幼児教育界に発信する。

3. 研究の方法

A. 音楽的感受性に関する理論的探究

質的研究では、幼稚園で歌われた即興的な歌の事例を収集し、その事例を分類することを通して、即興的な歌の特質を検討する。また量的研究では、小池(2009)において開発した「音楽的な感受性尺度」尺度に加え、質的研究で明らかになった幼児の自発的な音楽活動を指標として加え、保育者対象の質問紙調査を行う。この結果に対しては、主としてパス解析を通じて幼児の自発的な音楽活動を促す保育者側の要因を検討する。

B. 音楽的アクティビティと音楽表現プロジェクト

音楽的感受性を伸張するアクティビティと、これらを組み合わせたプロジェクトを実施する。このプロジェクトの実践結果を検討することで、幼児期の音楽表現指導モデルを提案する。

4. 研究成果

A. 音楽的感受性に関する理論的探究

音楽的感受性に関して、「日常的な場面での音のリズムへの気づき」についての質的研究と、質問紙による「保育者の音楽的感受性の影響分析」についての量的な検討の双方を行った。

A-1. 日常的な場面での音のリズムへの気づき

幼児自らが創作し、自発的に歌った歌を「即興的な歌」として、幼稚園で歌われた即興的な歌を36事例集め、分析した。結果として、言葉の意味を有している歌と意味の無い音からなる歌に分かれること、言葉の意味を有している歌であっても繰り返しの中で意味を失うものがあること、即興的な歌には会話的な歌と独語的な歌があること、音楽的特質をもたらすためには抑揚変化と繰り返し(オスティナート)が重要であることを指摘した(深田, 2016; Fukada, Ando, & Koike, 2017)。

A-2. 保育者の音楽的感受性の影響分析

保育者 986 人にアンケート調査を行った。得られたデータに対して、経験年数、音楽的感受性 2 因子（子どものリズムカルな言葉・動きへの感受性、音楽・リズム一般に対する感受性）、保育者の信念 2 因子（音楽的な正確さの強調、音楽の楽しさの強調）、保育者の音楽的技能 3 因子（リズムカルな動き、オノマトペ表現、ピアノ実技）、音楽的活動の頻度 2 因子（子ども中心的な活動、練習中心の活動）、幼児の表現 2 因子（リズムカルな言葉で歌う、リズムカルな音で遊び）を観測変数としてパス解析を行った。その結果は図 1 に示した。パス解析からは、子ども中心的な音楽活動が子どもの表現を豊かにするために重要であること、子ども中心的な音楽活動のためには保育者の感受性が高いことが重要であること、保育者の音楽的なスキルがあるだけでは子どもたちの自発的な音楽表現が引き出せないこと、保育者の経験年数は音楽的感受性をやや高めることなどが見いだされた (Fukada, Koike, & Ando, 2017)。

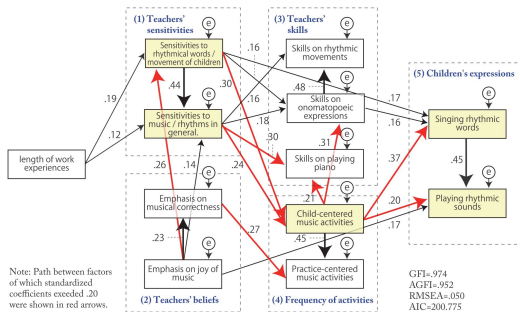


図 1. パス解析で得られたパスダイヤグラム

B. 音楽的アクティビティと音楽表現プロジェクト

先の A. の研究で、子ども中心的な音楽活動が子どもの表現を豊かにするために重要であることが明らかになった。これを受けて表 1 のような 20 のアクティビティを実施し、その効果を確かめた。さらに、これらのアクティビティを組み合わせ「音楽表現プロジェクト」を次の通り実践した。

表 1. 本研究で試みた音楽的アクティビティ

音楽と対話	1	即興的な音会話
	2	リズム即興
	3	ブームワッカーのリズム打ち、ベルのリズム打ち
創造的な音具	4	ふうせん缶太鼓
	5	手作りギロ（アルミフレキシブルダクトギロ、ストローギロ）
	6	しゃもじで作るカスタネット
	7	手作りカズー
	8	ホースで作るレインスティック
	9	クリアケースのオーシャンドラム

音の同定と表現	10	茶碗や湯飲みを叩く活動
	11	森のサウンドスケープ体験
	12	サウンドマップづくり
	13	自然音のオノマトペ表現
音楽と他の学び	14	身近な音具の音のオノマトペ表現
	15	(造形) 自然音の描画
	16	(造形) 手作り楽器の音の描画
	17	(造形) 描画からの音再現
	18	(造形) 音印象に基づく色選択
	19	(科学) ストローでピン吹き
	20	(科学) ストローのパンフルート

B-1. 手作り楽器と音素材を用いた幼児の擬音表現・音描画・音即興

この実践では、擬音表現・音描画・音即興を組み合わせプロジェクトを保育園と幼稚園の計 2 園において、2 回ずつ実践した。ここで用いた音楽的アクティビティは、1, 2, 4 ~ 10, 16, 18 番の活動であった。

最初に、手作り楽器/音素材を選択し、音を比べながら聴く活動を行ったところ、「茶碗、湯のみ」「アルミフレキシブルダクトギロ」「ふうせん缶太鼓」の順で選択された。次に、幼児が聴きとった音を絵として描画する活動を行った。全体的には波形が多かったが、ぐるぐるのらせん、短線や線と点との複合的な形なども見られた(図 2)。描画後に音印象から色を選択する活動を行ったが、これについては一貫性のある回答は得られなかった。

後半の活動として N 保育園では手作り楽器 3 種類による音即興を行った。鳴らす速度が速いとリズムは単調で即興的にリズムパターンを変化させることはなかったが、速度がゆっくりになると個々のメンバーがリズムを変化させる試みが現れた。F 幼稚園では、手作り楽器カズーによる会話的音即興を試みた。著者がリーダーとなり、1 人 1 人が順番に自分のリズムで楽器を鳴らすと、即興的に個々の幼児の独自の即興リズムによるグループ対話的な応答が生まれた(安藤・深田, 2017)。

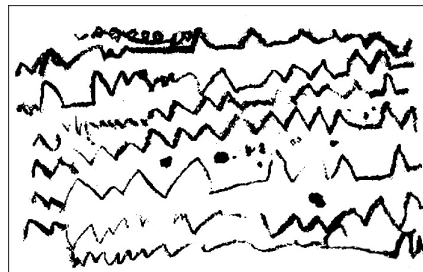


図 2. 音の描画

B-2. オノマトペを用いた即興的なアンサンブルの構成

この実践では、子どもたちによるオノマトペを用いた即興的なアンサンブルを行った。用いた音楽的アクティビティは、11, 13, 15,

17 番の活動であった。

まず 5 歳児たちが近くの森に出かけ、幼稚園に帰った後、森のサウンドスケープの中にある音をオノマトペで再現した。1 週間後、子どもたちはオノマトペを絵に描いた。さらに 5 ヶ月後、4 ~ 5 人の子どもたちがグループを作り、自分たちが絵に描いたオノマトペを使うことで、即興的なアンサンブルを行うことができた（図 3）。

このプロジェクトの結果、オノマトペは森の中での視覚的・聴覚的な印象から引き出され、絵の中で文字や図形で表現されることが示された。最後の活動である、子どもたちのオノマトペ・アンサンブルでは、オスティナート、リズムパターン、声の強弱の点で、自発的な音楽の要素が作り出されていたことが見いだされた（小池・深田，2016）。

♩ = 50

男児 D
へちへちへちへちへち

男児 E
ごりごりごりごりごりごりごり

男児 F
ざーざーざーざー

男児 C
ふーふいふ ふうふいふ ふう ふうふ ふう ふうふ ふう ふうふ

図 3. オノマトペ・アンサンブルの譜例

C. 保育界への研究結果の還元

本研究の研究結果は、論文や国内学会のみならず、EECERA あるいは PECERA といった国外の学会でも積極的に発表した。また保育者対象の講演会でも公表し、研究の成果を保育界に還元した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

安藤千秋・深田昭三，手作り楽器と音素材を用いた幼児の擬音表現・音描画・音即興の試み，香川短期大学紀要，査読有，45 巻，2017，183-195

深田昭三，幼稚園における即興的な歌に対する言語・会話面からの事例分析，愛媛大学教育学部紀要，査読無，63 巻，2016，83-92，<http://www.ed.ehime-u.ac.jp/~kiyou/2016/pdf/08.pdf>

小池美知子・深田昭三，幼児のための創造的な音楽プロジェクトの開発 - オノマトペを用いた即興的なアンサンブルの構成 - ，松山東雲女子大学人文科学部紀要，査読無，24 巻，2016，29-42，<http://iyokan.lib.ehime-u.ac.jp/dspace/bitstream/iyokan/5144/1/24-3.pdf>

〔学会発表〕（計 6 件）

Fukada S.，Ando C.， & Koike M.，

Examination of preschoolers' spontaneous and inventive singing during free play. Poster presented at the Annual Conference of the Pacific Early Childhood Education Research Association.，2017 年，Cebu, the Philippines.

Fukada S.，Koike M.， & Ando C.，Qualities of effective teachers in music education for young children in Japan.，Poster presented at the Annual Conference of the European Early Childhood Education Research Association. 2017 年，Bologna, Italy

小池美知子・安達雅彦・安藤千秋・上田豊・木戸純子，保育士養成課程改正後の教科目「保育表現技術」の捉え方と授業実践の現状 その 2：保育表現技術（音楽）の内容とその習得に着目して，全国大学音楽教育学会，2016 年，鹿児島女子短期大学

小池美知子・深田昭三，幼児のサウンドスケープからオノマトペ表現活動へ：5 歳児の創造的な音楽活動の実践に基づいて，日本乳幼児教育学会，2016 年，神戸女子大学・神戸女子短期大学

香川実恵子・小池美知子，5 領域に基づく事例分析を通じた「幼児の発達と援助」への理解，日本保育学会，2016 年，東京学芸大学小金井キャンパス

小池美知子・深田昭三，5 歳児の線画を用いた音楽的なオノマトペの可能性，日本乳幼児教育学会，2015 年，昭和女子大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

深田昭三（FUKADA, Shozo）

愛媛大学・教育学部・教授

研究者番号：5 0 2 2 8 8 6 3

(2) 研究分担者

小池美知子（KOIKE Michiko）

松山東雲女子大学・人文学部・教授

研究者番号：6 0 3 3 1 8 7 3

安藤千秋（ANDO Chiaki）

香川短期大学・子ども学科第 1 部・教授

研究者番号：7 0 2 9 0 5 8 3